

母子分離システムの中でより良い看護を提供する為には

— 三年間を振り返って —

10階西 ○松下あゆみ 佐藤 山本 高橋 緑川 長谷川
近藤 岩川 桐沢 椎名

はじめに

当小児内科病棟は昭和61年の新館移転に伴い、母子同室入院システムから患者のみを入院させる母子分離入院システムに変わった。(母子分離入院の定義は『患児を母親から離す事を治療目的として入院する事』であるが、ここでは単に患者のみを入院させるシステムを母子分離入院システムと呼ぶ)。

母子分離入院については、小児看護界において賛否両論がある。私達も暗中模索を繰り返しながら行った3年間の看護を通し、母子分離入院は親からの分離不安等マイナス面も多いが、プラス面も少なくないと考えた。そこでプラス・マイナスの内容を知る事により、マイナス面をより少なくする関り方ができるのではないかと考えた。

今回、退院した児の家族の協力を得て入院した患児の変化を追ひ、その分析を行なうことにより、母子分離入院の中でより良い看護の提供について考察したのでここに発表する。

研究方法

- 1) 10階西病棟に入院した患児の家族にアンケートを配布、集計し入院中及び退院後の患児の変化を知る。
- 2) アンケート結果を分析し、当病棟の看護について検討・考察する。
- 3) 調査期間及び配布数・回収数
 - 期間 昭和63年7月10日～8月10日
 - 配布 234名 ○方法 郵送
 - 回収 99名 ○回収率 42%
- 4) アンケートの分析方法

子供の発達段階の特徴より次の4群に分け、研究の中心課題である患児の入院中、退院後の変化を知る目的にそい、アンケートの14番を重点的に分析する。(アンケートは別紙)

1群 0～1才 2群 2～3才
3群 4～9才 4群 10～15才

結果及び分析

1) 患者背景

入院期間 3日～20日以内 71%
家族構成 核家族 86% 同胞2人以下 78%
入院時の母親の気持 不安・心配・淋しい 80%

2) アンケート№14の回答結果

右ページ グラフ参照

3) 分析

グラフ①

全体的に悪い変化に対し、良い変化が高率を示した。

グラフ②

1群では悪い変化として退院後の無口、無表情、夜泣きが1例ずつあった。

2群では、自立心がついたが群の良い変化の60%を占め、集団生活体験による自我の芽生えが感じられた。

3群では、我慢強くなった、友達ができた等精神面、社会面で良い変化が目立ち、悪い変化は生活時間が乱れた、言葉が乱れたであった。

4群の良い変化は優しくなった、思いやりができた。悪い変化は勉強の遅れであった。

変化の内容は、入院中と退院後で大差はなかった。1群～3群の良い変化として、生活リズム・偏食の改善等基本的生活習慣に類するものが多く、悪い変化では甘え、我儘が全年令共通であった。

考 察

乳幼児期において母親から受ける影響は大きく、分離により生じる不安や、新しい環境への適応を求められる不安は種々の反応を起こさせる。伊藤は「乳児後期に両親を特別な人と認知し始め、アタッチメントが成立する幼児期迄における母親からの分離は、強い外傷体験となる。このストレスは子供の耐性を越えたものだ」と述べている。しかし、私達の調査では先にも述べた様に良い変化が優位を占めた。

良い変化として多かった基本的生活習慣については、

結果の患者背景にもあるように、小家族構成の中で生活する子供達が、他児とのかかわりの体験や、日課表に基いた生活の中で得た結果であると考えられる。自我の目覚め始める幼児期においては積極的になった。一人立ちできた等の回答が多く、集団生活を送る中で家庭では得られない良い影響を受けたと考えられる。又、幼児期から学童期においては、友人関係も広がり、他人に優しくするという社会性の発達も認められている。全年令にわたる変化である我儘は、文献によると「母親との分離により生じる愛着行動の表れである」といわれている。又、一方で幼児期の自我の目覚めが、母親が見れば我儘と写るのではないかと考えられる。10才以上の児においては、他の年令に比べ回答が少なく、又回収された中でも、未記入、なしが多い。これは、問題が表面化せず、母親もとらえられなかったためと考えられる。母子分離による影響よりも、学校

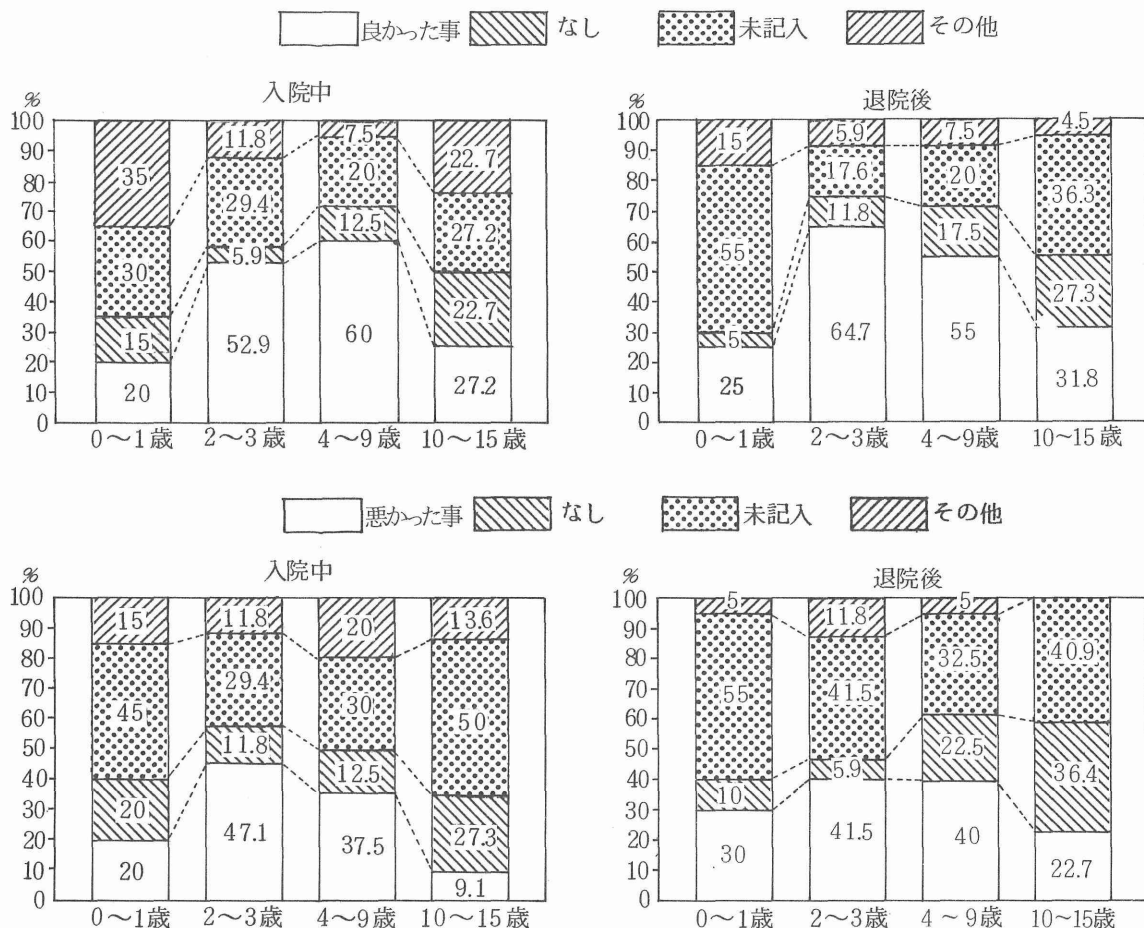
友人との分離の影響がより大きい年令であるといえる。

約3年間の母子分離システムの中で日課表に基づく基本的生活面での関わりは、一定の評価を得たと言える。現システムに移行し、全生活を通じて看護を行うことにより、子供の疾患だけを見るのではなく、子供全体を観る事ができる様になった事も成果の一つであると言える。今後の課題としては、看護婦、母親共に、我儘を愛着行動及び自我の目覚めであると認識し、接していけるようにする事、又手がかかる乳幼児や重症患児に目が行きがちであるが、学校や友人から切り離され、制限された生活を強いられる学童に対しても、勉強や遊びの面を通じて関わりを多くし、児の変化をとらえていく姿勢が大切であると考ええる。

小児の発達段階を理解し、子供を全人的にとらえることにより、看護の質を一步向上できるように努力していきたい。

アンケート№14の回答結果

グラフ① 全回収に対する変化の率



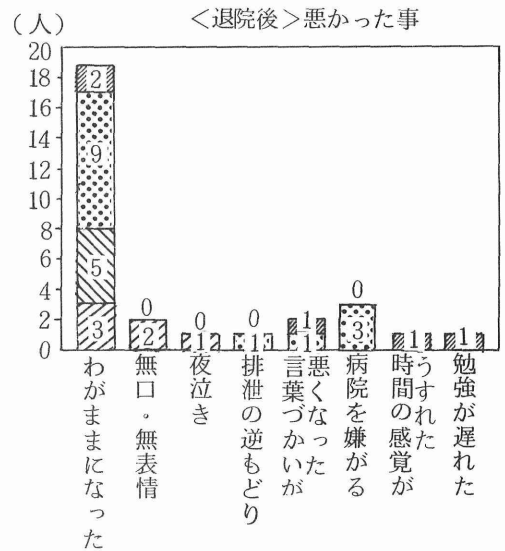
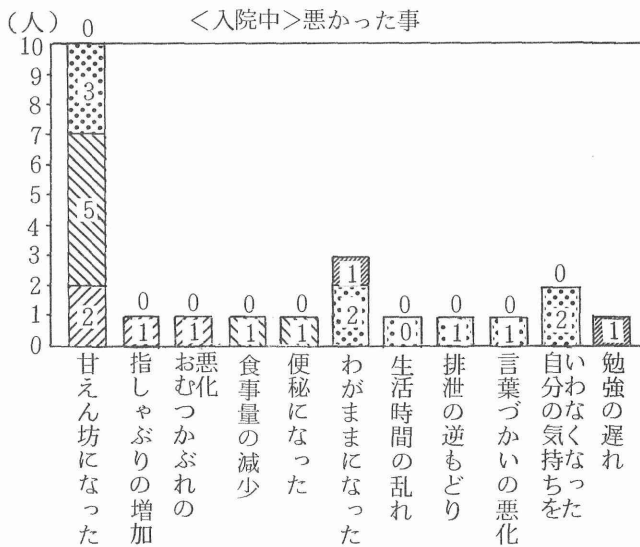
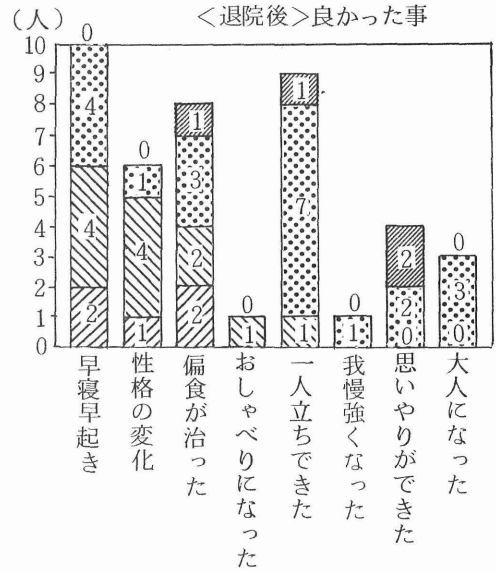
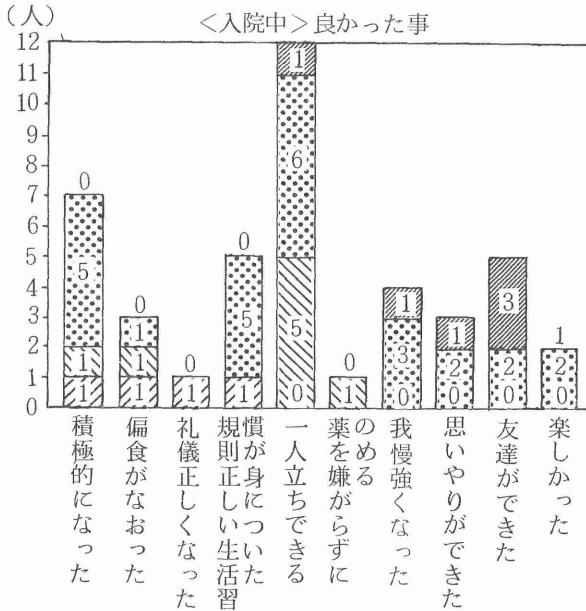
グラフ② 回答の内容

0～1歳

2～3歳

4～9歳

10～15歳



おわりに

今回、母子分離入院を経験した児の変化を分析、考察することにより、児の疾患のみをとらえるのではなく、成長発達をふまえて全人的に観ることの必要性を認識させられた。又、現システムに移行してからの3年間の看護を振り返る良い機会となった。アンケートの回収率が悪く、解答にも未記入、なし、不適切なものが多かった。これは質問方法に問題があったと思われる、反省すべき点である。今後は、今回の研究結果をふまえ、より良い看護を展開していきたい。

参考文献 小児看護 へるす出版

- 1986-6 新井和美 他 幼児期の日常生活とその看護
- 1986-7 内藤キヨ 他 長期入院中に生きる学習をした患児への援助
- 1987-3 長谷川 浩 不安の解決と対処
- 1988-4 宮崎 叶 心の発達とその評価

別 紙 ①

1. お子様の性別（ 男 ・ 女 ） 年齢（ ）才	11. 面会にいらっしゃるときのお気持ちをお教え下さい。
2. 病名（ ）わかる範囲で結構です。 入院期間（ ）日	12. 飲食物の持ち込み禁止に関してどのように思われますか。
3. 御家族は何人ですか。（ ）人 そのうちお子様は何人ですか。（ ）人	13. 面会時間中は病棟外に出られませんかどのように思われますか。
4. お住いはどちらですか。（ ）都・県 （ ）区・市） 通院するのにどの位かかりますか。（ ）分	14. 入院してお子様に関わったことはありましたか。 入院中に気づかれたこと：よかったこと
5. アンケートの記載者はどなたですか。 ○印をおつけください。 母 父 祖母 祖父 その他（ ）	
6. お子様をひとりで入院させると告げられたとき、どのような気持ちでしたか。	
7. 入院に際し、事前にお子様説明なさいましたか。（ はい いいえ ） 「はい」と答えられた方は、どのように説明なさいましたか。 お子様 お子様はどのように受けとめられましたか。 イ、納得した ロ、泣いた ハ、とても困らせた ニ、その他（ ）	わかったこと 退院後に気づかれたこと：よかったこと
8. お子様は付き添いなしの入院ですが、付き添いたいとおもいましたか。 （ はい いいえ ） 「はい」と答えられた方はその理由を御記入下さい。 「いいえ」と答えられた方はその理由を御記入下さい。	15. お子様が入院している間、心配された事は具体的にどんなことでしたか。
9. 面会日（週5日）に関してはどう思われますか。 多い 少ない ちょうどよい その他（ ）	16. 職員に対して一番何を望みますか。 医 師 （ ） 看護婦 （ ） その他 （ ）
10. 面会時間（ pm 3：00－7：00 ）に関してはどう思われますか。 長い 短い ちょうどよい その他（ ）	17. その他何でも結構ですのでどうぞ御記入ください。